

1. 研究目的

本研究は、人間の主体性基盤である自己肯定感(自尊心)に焦点をあてた研究である。自己肯定感は、人間が心理的・身体的健康を保ちながら社会に適応して生きていくために重要な役割をもっている。自己肯定感は、乳幼児期における親子の関係性を基盤として、保育者、近隣者などの人的環境から作用を受けて育てられる。A 幼稚園は、一人ひとりの自己肯定感を大切にされた保育実践を積み重ね、自己肯定感向上に向けて保育環境、保育内容を丁寧に構成・調整している。

多くの先行研究から親自身の自己肯定感のあり方や肯定的養育態度、感情が、子どもの自己肯定感に大きく影響をおよぼすことが明らかになっており、本研究ではA 幼稚園の保護者の自己肯定感や、養育感情、態度に着目し、現状を分析・整理することによって、子どもの自己肯定感育成のための課題を明らかにしたいと考えている。

2. 本研究における自己肯定感の定義

自己肯定感の定義として、「ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面もふくめて、自分が自分であっても大丈夫という感覚、感情である」(田島賢侍・奥住秀之 2013)を援用したい。自尊感情には少なからず「評価」の視点があるが、多くの文献では、自尊感情と自己肯定感を同義として扱っていることから、本研究も同義として位置づける。

3. 研究の方法

幼保連携型認定A 幼稚園保護者に対して自記式アンケート調査を実施した(2021 年 8 月 2 日～8 月 25 日)。「自己肯定感尺度」(Mimura & Griffiths 2007 日本版 RSES)と「親の養育感情・態度 15 問」(「育児不安尺度」(牧野カツコ 1983)、「親役割診断尺度」(谷井淳一・上地安昭 2001)を中心に構成)を用いて、親の自己肯定感の現状分析をした。いずれも「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 件法で質問した。さらに、親が感じる子どもの自己肯定感から、子どもの自己肯定感育成に向けた課題を明らかにした。

統計分析ソフトは、SPSS Statistics28、質的分析は、MAXQDA Standard を用いた。

4. 結果と考察

1) 対象者の主な属性

アンケート配布数 176 家庭に対して回収数は、114 票であった(回収率 64.8%)。分析対象者の主な属性は、母(94.7%) 父(5.3%)、就労時間の平均値は 6.88h、中央値 7h、最頻値は 8h であった。家族形態は、子どもと両親(87.5%)、ひとり親と子ども(6.3%)、子と両親と祖父母(いずれか一方を含む)(2.7%)、ひとり親と子と祖父母(いずれか一方を含む)(2.7%)、であった。

2) 親の自己肯定感と家族構成

自己肯定感尺度データに Cronbach の信頼係数を求めたところ、係数は.853 であり、ほぼ内的整合性が認められた。平均値 2.696、最小値 1.6、最大値 4.0 であっ

た。対象者の自己肯定感尺度合計値と基本属性から χ^2 相関係数を求め独立性検定を行ったところ、家族構成に有意な関係性が認められた(Cramer の $V=0.512$ ($p=0.036 < 0.05$))。ひとり親家庭の親に自己肯定感が低い傾向がみられた。

3) 親としての自己評価値と養育感情・態度

親としての自己評価値を 100 点満点で問うたところ、平均 62.56、中央値 60、最小値 10、最大値 95 であった。自己評価値の理由を「親の養育感情・態度 15 問」から問い、これをカテゴリカル回帰分析したところ、「子どもが楽しそうにしている」($p=0.001$)「子育てで子どもにすまないと思う面がある」($p=0.04$)「自分が理想とする親イメージと自分自身に乖離を感じる」($p=0.047$)の項目に有意差が認められた。この回帰分析について重相関係数(多重 R) 0.702、 R^2 0.493、調整済み R^2 0.341、F 値 3.261 ($p=0.000$) であった。

4) 「子どもが楽しそうにしている」と親の自己肯定感

「子どもが楽しそうにしている」(4 件法による 4 値データ)と親の自己評価値、自己肯定感尺度合計値を Spearman の相関分析にかけたところ、それぞれの関係に有意差が認められた。「子が楽しそう」×「自己評価値」(0.300, $p=0.001$)、「自己肯定感尺度合計値」×「自己評価値」(0.621, $p < 0.001$)「自己肯定感尺度合計値」×「子が楽しそう」(0.239, $p=0.012$) であった。つまり、「子どもが楽しそうにしている」ことが親としての自信や意欲につながり、親自身の自己肯定感向上にもつながることが認められた。

5) 親が感じる子どもの自己肯定感

子どもの自己肯定感の現れの一つとして「元気で前向き、意欲や自信をもって取り組むこと」と位置づけ、親に 4 件法で問うたところ、「ほとんどの場面において感じる」(46.8%)「場面によって感じる」(53.2%) が示され、否定的に評価している保護者は 0% であった。さらに、A 幼稚園の保育環境・内容を 18 項目あげ、「子どもの元気で前向き、意欲や自信をもつ取り組みであるか」を、「はい」「いいえ」の 2 件法で聞いたところ、平均値が 0.6 以上の項目は「食育活動」(平均 0.73)、「園内行事」(0.65)、「先生の声かけや働きかけ」「うんどうあそび」(0.60) が示された。なお、平均値は、0.406、Cronbach のアルファ 0.864 で信頼性が認められた。

6) 子どもの自己肯定感育成に向けた本研究の課題

「子どもが楽しそうにしている」ことが親の自己肯定感を高め、親の自己肯定感向上が子どもの自己肯定感も高める。子どもの自己肯定感向上が、さらに親の自己肯定感を高めるという親子の関係性における子どもの自己肯定感向上の循環的相互作用の手がかりを本研究から得ることができた。

子どもの自己肯定感には、一日の大半を過ごす A 幼稚園の影響が大きいと考えられることを柱に、質的分析を中心として A 幼稚園の保育環境・内容を精緻に分析していくことが、今後の本研究における課題になる。